
遊戯王～異世界に巡りし絆～

ハルモニア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜異世界に巡りし絆〜

【Nコード】

N2579R

【作者名】

ハルモニア

【あらすじ】

無類のオタク少女、須古星遊香はある日突然、上空からの稲妻に呑みこまれ知らない場所に目を覚ます。そこで遊戯王の世界に出てくる遊戯、十代、遊星に出会う。

一行はデュエルモンスターの力で異世界を支配しようとする者たちの企みを阻止しようと一致団結して数々の世界に渡る。

これは、人の夢や希望を守り、次元を超えた絆が紡ぎだす物語。

プロローグ：数奇な出会い

〈学校〉

中学生の少女、須古星遊香は今日1日の授業を終えて学校から出る。

「ハアツ…ハアツ…急がないと始まっちゃう…」

遊香は急いで家に帰ろうと走り出す。

コロコロコロ…

すると上空から黒い雲が太陽の光が遮断され、雷が鳴り出す。

「な、何？今日は雨は降らないはずなのに…」

不気味な天気に関を引きながら上空を見る遊香。

稲妻の光が激しく光り、地面が揺れるほどの雷鳴が鳴り響く。

ピシャー…！…ッ…！！

次の瞬間、辺りの上空が光り出し、遊香の真上から大きな稲妻が迫ってくる。

「きゃあああああつ…！！」

遊香はそれから逃げ出す間もなく光に呑みこまれていった。

く?????

「んっ……うん…ここは」

横になって気絶していた遊香が目覚め、ゆっくり起き上がる。

「あれ？さっきの場所と違うデス。確かワタシの上に雷が落ちて…」

辺りを見回すと、石畳が綺麗に敷かれており遊香を中心に部屋のよ
うな場所が4つある。

逆立った髪に金の逆三角錐のペンダントがぶら下がっている小柄な
少年と赤いジャケットを着ている少年、青いジャケットに特徴的な
髪を持つ青年、合計3人が目の前に倒れていた。彼らを見て一瞬目
を疑う。

「えっ…ええっ…ええ………っっ!!?」

（な、なんで!?!?なんでここに“遊戯王”の歴代主人公3人がいる
んデスカ……!!?）

「…これって、夢じゃないですよね?」

そう、彼らはアニメ遊戯王シリーズに出てくる主人公、のはずが何
故か目の前にいて大きく動揺する。

思わず目を擦ったり頬をつねったりして夢じゃないと確信する。

（はっ！それより早く3人を起こさないとー！！）

「あ、あのー！みなさん起きてくださいー！！」

遊香はとりあえず倒れていた3人を起こす。

「うっ……ここは」

「うーん……どこだよここ」

「……あれ？僕は一体」

3人が無事に目を覚まし、ホッと胸を撫で下ろす遊香。

「あっ！君たちは！」

「えっ！？ゆ、遊戯さん！？」

「――！遊戯さん、十代さん……！！」

3人が久しぶりに友達が再会するように驚愕し、「久しぶりだね！」とか「また会えてうれしいです！」などの喜びの声が出てくる。

「あ、あのお……」

「――えっ？」「――」

遊香の呼びかけに3人が一斉に振り返る。

「（ビクウツ――）あ、ああのー！お怪我とかはありませんか！？」

「う、うん。大丈夫だよ」

「オレも何ともないぜ」

「俺も大丈夫だ。それよりここはどこだ？」

「わ、分かりません。ワタシもさっき気がついたばかりなんで……」

「そうか」

（うわぁ〜本物の“遊戯王”の主人公デス〜！！遊星と十代すごくカッコいいし、遊戯は小さいですけどとても可愛いデス！！ぁ〜、もう今死んでも悔いはないです…）

自分の世界に妄想しまくりの遊香に3人は思わず首を傾げる。

「君、名前はなんていうの？」

「？！あ、わ、ワタシは須古星遊香と言います。よろしく、お願いします！」

「僕は武藤遊戯、さつきは起こしてくれてありがとう」

「俺は不動遊星、よろしくな」

「オレは遊城十代、よろしくな遊香！」

「は、はい！！」

（はう〜、ワタシの前で自己紹介してきました…。しかも十代に名前呼ばれて、もう本当に死んでもいいです…えへっ）

「ゆ、遊香？」

「はっはい！！」

「大丈夫か？さつきからなんか変だぞ？」

「具合でも悪いのか？」

「いえいえ！！だいじょうぶです！！気にしないでください！！」

（ワタシが別の世界の出身であの人たちがテレビアニメの主人公だなんて言えません！！いくらこの人たちが親切でもそれだけは言えないデス…！！）

『お待ちしておりました』

「……！？誰（だ）（ですか）……！！？」

突然どこからか女性ののような声が聞こえてきた。4人は辺りを見回すが声の主の姿がない。

パアアーーーーーッ!!

そのときまばゆい光が現れ思わず目を瞑る。すると、目の前に半透明な美しい女性が現れた。

「あ、あんたは一体…」

『私はデイメス、異次元の世界を守護する者』

「……デイメス?」

デイメスと名乗る女性は4人に向けて微笑む。

『あなたたちがここに来ることは初めから分かっていました』

（（この人、イシズさんに似てる…））

遊戯と遊香はデイメスを見て知っている人物を思い浮かぶ。

「聞かせてくれ、なぜ俺たちがここにいいのか」

『ええ、あなたたちの世界に今何が起きているのか。全てをお話ししましょう』

『遊戯、十代、遊星、あなたたちの世界ではデュエルモンスターのカードやモンスターが消えかけていましたね』

「えっ!?!?」

「ああ、カードの絵柄が消えていくだけじゃなく、決闘者たちの様子もおかしかった。次々と決闘者やカードを持っていた人たちも行方不明になっている」

「それに、デュエルモンスターのに関する情報も全てが削除されていた」

十代と遊星の言葉に遊香は失言し、遊戯は思い悩む表情をしていた。

「僕たちを「新世界へいかないか？」と誘われるし、「この世界に夢や理想なんてあるものか」とか言ってた」

「……!! ああっ! そういえば!!」

遊香が何か思い出したように答える。

「ワタシの所にも一週間前から自分が持っていたカードが消えかかってました! カードだけじゃなく、夢を持つ子供たちを中心に失踪が相次ぎ、その家族や関係者たちが次々を殺害されて暴動が発生する事件が何度も起きたデス!」

遊香の言葉に3人も驚きも隠せなかった。

『今あなたたちが答えたように、デュエルモンスターズだけじゃなく人の夢や幻想が奪われています』

「一体、誰がそんなことを」

『恐らく、デーマと呼ばれている人物の仕業です』

「デーマ?」

『彼はデュエルモンスターズの力を使って別の世界を支配し、不可思議な力や人々が持つ特殊な能力を奪い、全ての世界を納める神になるうとしているのです』

「そ、そんな!?!」

「デュエルモンスターズの力で別の世界を支配するだ!?!」

「……なんて奴だ」

遊香は信じられないと思うように動揺し、遊戯たちは険しい表情をする。

『そこであなたたちをお願いします。デーマの企みを阻止し、異世界を救ってほしいのです。もし私の願いを聞いてくれたらあなたたちを元の世界へ帰して上げましょう』

「ほ、本当!？」

「それで、その願いとは何なんだ？」

『そんなに難しいことはありません。異世界にいるデーマの手下や操られている者たちを倒し、シリアルナンバーカードを手に入れることです』

「シリアルナンバーカード？」

『人の可能性を信じた者のみそれを手にすることができる未知のカード。カードは全部で51枚あります。1枚は私が持っているので残り50枚集めて欲しいのです。基本的に一つの世界に一枚存在します。もし複数の世界が融合していたら複数のカードがあり、時には一つの世界に複数のカードが存在することもあります』

「なるほど、そのカードを全部集めればどうなるんだ？」

『全てを集めた者に新たな力と可能性を手に入れることができます。良き心を持つ者は人々の心に希望を与え、悪しき心を持つ者は人々の夢を奪い絶望を与えるでしょう』

「ふーん、要はデーマという奴より先にそれを全部手に入ればいいんだろう？」

『そうです。…引き受けてくれますか？』

遊戯たちは互いに顔を向けると、決意するように頷く。

「分かった。俺たちで良ければ喜んで協力しよう」

「ああ！デュエルモンスターズを悪行に使う奴を見過ごしてたまるかっての!！」

「また一緒に戦えるね!」

ディメスの頼みに快諾し、何気ない会話をする3人。

『あなたはどうしますか？遊香』

「えっ！？」

遊香はディメスの問いかけに困惑し、3人が遊香に振り向く。

「わ……ワタシは……」

顔をうつ向かせ、迷っている遊香に遊香が声をかける。

「遊香ちゃん」

「っはい」

「君はデュエルするのが好き？」

遊香の問いかけに目を見開く遊香。

「…はい」

「遊香、それならば何を迷っているんだ。君が俺たちをどう思っているのかは分からないが、そんなに気を遣う必要はないだろう？俺たちと君が出会った意味は必ずある」

遊星の言葉に十代と遊香は頷き、遊香は思わず感涙しそうだった。

「遊戯さん、十代さん、遊星さん、ワタシは…ワタシも、皆と一緒に行きたいです！ワタシの力は遊戯さんたちには到底及ばないかもしれない。でも！それでもワタシは今！皆と一緒に大切なものを守りたいです！お願いします！ワタシも一緒に協力させてください……！」

遊香は必至の想いを叫び、遊戯たちやディメスに頭を下げる。

「へへっ！決まりだな！」

「一緒に頑張ろうね！」

「これからもよろしくな、遊香」

「っはいデス！！」

遊香は満面の笑顔を見せる。

『ありがとっ、私の願いを引き受けてくれて…。本来なら私がやらなければならないことを…』

「気にするな。困った時はお互い様だろう？」

「遊星の言っとおりだぜ！」

『では、私が持つシリアルナンバーカードを授けましょう』

ディメスの手に一枚のカードが輝き、遊香の手に渡る。

『それを遊香、あなたに託します』

「ええっ！？い、いいんですか！？」

『はい、あなただからこそです。あなたには3人にはできないことができる可能性が秘められています』

「ワタシが、ですか？」

首を傾げる遊香に頷くディメス。

「…分かったデス！引き受けましょう！」

『ありがとっ、それともう一つ』

遊香の目の前には白がメインカラーのデュエルディスクに翼が付いてる二つの腕輪、十代にはローラースケート、遊戯にはスケートボ

ード、遊星には自作のD・ホイールが現れた。

「おお！ローラースケートだ！カッコいいぜ！」

「すごい！これ電動式だよ！」

「これは、俺のD・ホイール……」

「うわあゝすごいです！これもらっていいんですか？」

「ええ、いざという時に役に立つでしょう」

「あ、ありがとうございます……！」

『（ニコッ）では、最初の世界への扉を開きましょう』

遊香たちの後ろに空間歪曲の穴が開いてゆく。

『あの穴の向こうにあなたたちの知る世界とは別の世界につながっています。少なくとも遊香、あなたならどういふ世界が理解することが出来るでしょう』

「えっ！？は、はい……」

「それって遊香なら絶対知ってる世界に行くってことなのか？」

『そういうことになります』

「ならば遊香、あてにさせてもらおうぞ」

「あっはい！皆の力になるか分かりませんが、持てる全ての力を出して頑張ります！」

「ああっ！」

遊星はD・ホイール、遊戯はスケートボードに乗り込む。

十代はローラースケートを足に、遊香は腕輪を手首に装着する（腕輪は自分の意志で背中に翼を広げ、自在に空も飛べるらしい）。

『では、あなたの武運を祈ります』

「それじゃ、最初の世界へレッツゴーです……！」

遊香の掛け声に遊戯、十代、遊星は同時に頷く。

直後に遊香の背中に翼が広がり、宙に浮きながら穴に入っていく。
それを合図に3人も前に進む。

『頼みましたよ。歴戦の決闘者たち、そして可能性のカードに選ばれし者よ』

オリキャラ設定（前書き）

読者の皆様へ

更新遅くなって本っ当にすみません!!!(< | >)

オリキャラ設定

名前 須古星遊香

容姿 赤い髪の二つ結びに青い瞳

15歳の普通の少女。

普段は恥ずかしがり屋だが、漫画やアニメに関しては超がつくほど熱い。

敬語を使っていることが多い。

一番好きな作品は遊戯王。

趣味で自らイラストを描き、スキャナーでカード印刷してオリカを制作することがある。

将来は漫画家を目指しており、それに兼ねて小さい頃から絵を描いている。

デッキはオリカを使用します。

後書きなどで度々載せますのでそちらもご覧下さい。

第1話：最初の世界（前書き）

遊香は歴戦のデュエリストに出会い、異世界でシリアルナンバーカードを探し出す。

最初に辿り着いた世界は？

第1話：最初の世界

空間に穴が開き、遊香たちが到着する。

「（シュタツ）ふう、やっと着いたです〜！」

翼を消して地に降りた遊香は腕を空に向けてググツと伸ばす。
周りは見渡す限り高くいビルが幾つか建っている。

「おお、すげえぜ！！ここがどこだかワクワクすんな〜！」

十代が冒険を楽しむように言う。

「でも僕たち、本当に別の世界に来たのかな？」

「まずは此処《この世界》について何か情報を得ないと…」

「それに、これから僕たちが探すカードの手掛かりも見つけないとね…」

遊星と遊戯の言葉をキツカケに一行は情報収集を先決する。

「ラジャーです！」

「うっしやあ！んじゃさっそく行くぜ〜！」

遊香と十代は真っ先にやる気を見せる。そのまま我先にと近場の市街地へ進もうとした時…。

ドカアアアアアアンツ！！！！

「な、何だ！？」

近くで大きな爆発音が鳴り響き、十代が声を上げる。

「な、何ですかこの爆発!？」

「あっちから聞こえてきたけど…」

「行ってみましょう!」

遊星の言葉に三人は頷き、爆発があった場所へと向かう。

「きゃあああああ~~~~!!!!」

「助けてえ~~~~!!!!」

「何なんだあの化け物は!!!!」

爆発が遭った場所で市民達がパニックになりながら逃げ回っている。更に、都心の方から激しい爆発音が連発的に聞こえ、街中に響き渡った。

一行は市民達が逃げ回る方向とは反対側に進む。

「あ、あれは!？」

「何だと!？」

「まさか!？」

「も、もしかして…!？」

「~~~~デュエルモンスターのモンスター!!!!!!?」~~~~

なんと、街中を暴れていたのはデュエルモンスターの精霊たちだった。

ハーピー・レディーやタイラント・ドラゴン、デスカリバー・ナイト、ホルスの黒炎竜、ミノタウロスなどがこの世界で実体化しており、車や建物を破壊している。

「一体、どうしてこんなことに…」

「分らないが、こいつらがデュエルモンスターのことは確かだ」

「でも、どうすれば…」

そんな時、全員のデュエルディスクが光り出す。

「！？これは…！？」

「デュエルディスクが光っている！？」

『クリクリ』

『十代、こいつらを退けさせるならデュエルモンスターを使うしかない』

十代の側にハネクリボーとユベルが現れる。

「相棒、ユベル」

「これで戦えってことか」

「みたいだね」

「そうとなれば、思い立ったが吉日デス！ドロー！」

遊香はデッキから手札を5枚、追加で一枚ドローする。

「【セイクリッド・マジシャン】を召喚！」

金のラインに全体が白い魔法使いが現れる。

「行くデス！」

遊香が命ずると、セイクリッド・マジシャンは敵のモンスターへ攻

撃する。

遊戯の側に闇遊戯（名もなきファラオの魂）が呼びかける。

『相棒！』

「うん、僕たちも行くよ！」

「「はいっ！」」

「【ブラック・マジシャン】を召喚！」

「来い！【E・HEROネオス】！」

「飛翔せよ！【スターダスト・ドラゴン】！」

三人は遊香に続いてそれぞれのエースモンスターを召喚した。

「ブラック・マジック！」

「ラス・オブ・ネオス！」

「シューティング・ソニック！」

一行のモンスターたちの攻撃で次々と数が減っていく。

（……すごいデス！モンスターが実体化している上、三人のエースモンスターがこの目で見られるなんて……超々感激デス……！！）

三人の戦いぶりを見て目を輝かせる遊香。

そんな時、上空にバリアのようなものが覆い始めているのを気づく。

「！？これって、どこかで見たことあるような……？」

「遊香ちゃん危ない……！」

「えっ？」

遊戯の叫びで振り返ってみると、ミノタウロスが斧を振り上げていた。

「う、うわああああああっ！！！！助けてええええ！！！！」
「ロック・バスター！（バシューウウウウウンッ！！）」

ドカアアアアアンッッ！！！！

「ほ、ほえっ？」

斧の刃先が遊香に迫る時、誰かの攻撃によってミノタウロスが破壊された。

「大丈夫か！？」

「は、はい。……！！」

遊香が見た人物は、全身が青いボディカラーをした小柄な少年だった。

「ワイドソード！」

斬撃でモンスターが数体倒される。

そこに赤いボディカラーに髪を伸ばした人物が現れる。

「熱斗！このまま押し切るぞ！」

「おうっ！バトルチップ【サーチボム】、スロットイン！」

「ソニックブーム！」

助けられた遊香はそんな二人の猛攻を啞然とみていた。

同じくそれを目撃した三人も突然のことで驚愕していた（一人は興奮しているケド）。

「す、すげえぜあの二人！次々とあいつらを倒すなんてよ！」

「あいつらは一体…」

「…僕、あの二人知ってる」

「えっ？」

そう、彼らはこの世界を何度も救った英雄『ロックマン』とそのライバル『ブルース』である。

「プログラムアドバンス！！」

「ギガキャノン！」

「ドリームソード！」

連携攻撃を最後に相手は全滅した。

上空に覆っていたものが消え、二人は青白い光に包まれると、少年が目の前にいた。

『お疲れ様、熱斗くん』

「ああっ！」

「あ、あの…」

「んっ？お前は」

遊香の呼びかけに熱斗と呼ばれる少年が振り返る。

「さっきは助けってくれてありがとうございました」

「い、いやあ。俺は当然のことをしたままだよ。それよりお前たちは一体…」

「ワタシは須古星遊香と言います。よろしくデス！」

「オレは遊城十代」

「僕は武藤遊戯」

「不動遊星だ」

「俺は光熱斗。それとこいつはネットナビの『ロックマン』」
『よろしく』

「『『ナビが喋った!?』』」

先ほど現実世界にいたロックマンに十代は「すげえ〜!!」と目が輝き、他の三人は驚愕する。
そのことに熱斗とロックマンは一步引く。

「俺は伊集院炎山、そして相棒の『ブルース』だ」

こちらも現実世界にいたブルースが炎山の側にいる。
お互い自己紹介したところで、炎山が話題を変える。

「君たちには我々と一緒に『科学省』に同行してもらいたい」
「『『科学省?』』」

「我々ネットセイバーを組織する場所だ。君たちは何者か、あの怪物たちは何なのか、いろいろ聞きたいことがある」

炎山の言葉に一行は身震いする。

「分かった、連れて行ってくれ。遊戯さんや十代さん、遊香も」
「あ、ああ」

「うん」
「は、はい、お願いします…」

そんなわけで熱斗たちについていき、科学省へ向かうのだった。

「なるほど、あれが歴戦のデュエリストか…」

一つのビルの頂上に黒いコートの人物が一行たちを見下ろす。

「ふん、イレギュラーがいるのは誤算だったな。これは『あの方』に知らせねば……」

そう呟いて彼はその場から一瞬で消えた。

第1話：最初の世界（後書き）

今回のキーカード

【セイクリッド・マジシャン】

レベル4 / 光属性 / 魔法使い族 / ATK 1400 DEF 1300
このカードが召喚・特殊召喚・反転召喚に成功した時、デッキからカードを1枚ドローする。そのカードがモンスターカードだった場合、このカードの攻撃力はそのモンスターのレベル1×100ポイントアップする。

文才が一切無くストーリーやアイデアが思いつかなくて時間がかかりますが、今回は意外と早くできました。

面白かったですか？私自身も恥ずかしがり屋で出来た話を掲載するたびにドキドキしてます。皆はすごいな……。続きもわくわくする面白いものを書きますので楽しみに。

第2話：ネット世界の危機！？（前書き）

前書き 前話がいい状態に仕上がって良かったです。

しかし……！

『いい結果で当たり前の1話、勝負の2話』（漫画のセリフを一部変えた）

というわけで、ここからが勝負です。

それでは、いきます……！！！！

第2話：ネット世界の危機！？

デンサンシティ・秋原町にて、遊香、遊戯、十代は熱斗と炎山とリムジンに乗り込んで科学省へ向かい、遊星はD・ホイールについて行った。

〈科学省〉

正門をくぐりぬけ、一行は中へと進む。
そんな中、遊星は遊戯に小言で質問する。

（遊戯さん、さっきあの二人について知ってるって言うてましたけど、なにか心当たりあるんですか？）

（う、うん…ロックマンとブルースって言ったら僕が小さいころゲームで出てきたキャラだからもしかして思っていたから驚いたよ）
（ゲームで出てきた？）

（ああ、オレもさっき思い出したんだけど小さい頃ゲームでやったことあったぜ。バトルチップとか電腦ウイルスとかWWWにネビュラ、あと電腦獣とかいろいろ出てたぜ。あとアニメもやってた）

（うんうん！）

（そうなんですか）

（へえ…）

（遊星くんや遊香ちゃんはロックマンのゲーム知ってるかな？）

（いえ、デュエルモンスターズ以外のゲームはやったことないんです）

（ん…：友達の弟がゲームやっていたので名前と世界観は知っているんですが、詳しいことはあんまり分らないです）

「なあ、さっきから何の話してんだ？」

熱斗が話が割り込んできて一行はギクッ！と反応し、知られてはマズイと感じる。

「う、ううん！何でもないよ！」

「ああ、こつちの話だぜ；気にするな！」

「すいません、こそこそ話してしまつて；」

その慌てぶりに熱斗たちは一瞬首を傾げる。

「ここだ」

しばらく歩いて研究室にたどり着き、扉が開いた。

「パパ！」

「熱斗、炎山くん、お疲れ。あれ？その人たちは」

熱斗に父と呼ばれた科学者、光祐一郎の問いに炎山が今までの経緯を話す。

「なんとそうだったのか！君たちにいろいろ聞きたいことがあるが、まずは礼を言わせてくれ」

「いえ、気にしないでください」

「困った時はお互いさまつて奴だぜ！」

「ハハハ！そうだな。まあここにいるのもなんだから会議室へ話をしよう」

そう言つて一行たちは科学者についていき会議室に入ると、既に中にいた眼鏡を掛けてる名人やネット警察である貴船総督と真辺警視が座っていた。

一行と熱斗たちも椅子に座り、まずはお互い自己紹介した。

「…さて、早速聞かせてもらおうか」

代表として遊星が話を進める。

「はい、最初に言っておきますが俺たちはこの世界の人間じゃありません」

その言葉に熱斗たちは驚愕する。

遊星は証拠として自分のデュエルディスクとデッキを見せ、デュエルモンスターズや一行たちの世界について説明した。

「すつげえ…！」

『うん、ディメンショナルエリアなしで実体化するなんて…』

「一つ聞いていいか？」

「はい…」

名人が手を挙げて質問する。

「先ほど秋葉町に出現した怪獣たち…あれも君たちの世界のものなのか？」

「…厳密に言えばそうです。しかし別の世界に実体化して、ましてや『デュエリスト』がいない状態で街で大暴れするのは通常はあり得ません。そして、俺たちがこの世界に来たのには理由があります」
「理由？」

一行たちはこの世界に来る前の経緯を話した。

「な、なんと！そのデーマとやらが我々の世界を支配するというの

かね!？」

「信じられない…」

「俺たちもまだそいつについて詳しいことは分かりませんが、さっきもこの街にデュエルモンスターズが襲ってきたのが証拠です」

「…確かに、今回のような事件はここ数日世界中で相次いで発生している。彼らの話を信じざるを得ないか…」

光博士は腕を組んで呟く。

「それで皆さんに相談がありまーす!」

皆の視線が遊香に移る。

「皆さんの気持ちは御尤もデスが!このシリアルナンバーカードの在り処を探すために、そしてこの世界を救うために、ワタシ達もその事件解決に協力させて下さいーい!ー!ー!」

遊香はデイメスに託されたシリアルナンバーカードを手に取りながら熱斗たちに協力を要請した。

遊星たちも「お願いします」と頭を下げた。熱斗たちは動揺しながらも暫く話し合った結果…

「…いいだろう。君たちの協力を心から感謝する」

「熱斗くんたちネットセイバーとともに存分に頑張ってくれ!」

光博士や総督の了承で一行は喜びの顔が浮かぶ。

「今度は我々の世界について話をしよう…」

今度は熱斗たちの世界について光博士が話をする。

この世界は、PET（Personal Terminal）と呼ばれる携帯情報端末を持ち、そこに組み込まれた擬似人格型プログラム「ネットナビ」のサポートによって日常生活を送っている。しかし、それと同時にネット犯罪も増加し、ネット犯罪集団のばらまいたウイルスによる被害が身近なものとなっていた。

過去にWWWやゴスペル、ネビュラ、デューオ、ゾアノロイド、電脳獣などの脅威で世界は幾多も危機に瀕していたが、熱斗たちの活躍によって免れた。

「へえ…それじゃ熱斗くんやロックマンは、この世界の英雄というわけですね」

「いやあ、それほどでもないよ」

遊香の言葉に熱斗は照れるように笑う。

話し合いの結果、一行は事件の首謀者やシリアルナンバーカードの探索を優先して科学省に所属する形となった。

ちなみに遊星は同じ科学者というわけで光博士の勧めによって普段は科学省で勤めることに。

一行たちはしばらく熱斗の家に居候することになる。

最初は遠慮していたが、家族全員の快諾によってそれは解消された。

〈熱斗の実家〉

遊戯side

「ふう…今日はなんかいろいろなことがあったね」

『ああ、俺自身あまり今の状況に慣れてはいないが十代や遊星に再会できたのは幸いだな』

「そうだね…でもどうして別の世界でデュエルモンスターズが暴れ出したんだろう？」

『分からない。だが、今は出来ることをやるしかない。いつか分か

るその時までやってやろうぜ相棒！」
「…うん！」

十代side

「それにしても、オレたち本当に異世界に来ちゃったな。おまけに遊星や遊戯さんとまた会えた！」

『全く君は相変わらずだね…』

「へへっ！こんな機会滅多にないもんだし、これからどんな世界にいくのか益々楽しみだぜ！！」

『クリクリ〜！』

遊星side

（まさかあんな形で二人と再会するとはな…皆、俺のことを心配しているんだろうな）

「すまない皆、俺は遊戯さんや十代さん、そして遊香と一緒にやることができた。それが終わるまで俺の帰りを待っていてくれ」

遊香side

「はあ…今日は疲れたデス〜」

（お母さんたち、心配してるかもデス。“異世界でカードを集める”とはいってもどうすればいいんでしょうか…）

皆それぞれこれからの旅に期待と不安、そして疑問を募りながら夜を過ごした。

（翌朝）

「ふあ…そうでした。ワタシ別の世界にいたってました」

遊香が眠りから覚め、借りた部屋のドアを開けてリビングに向かう。

「あ、おはようです遊星さん」

「おはよう、遊香も早く起きたんだな」

「はい、まだちよつと別の世界には慣れてないです」

「気持ちには分かるが、焦らずにいいさ」

「…そうですね／＼／＼」

「？どうしたんだ？顔が赤いようだが…」

「い、いえ／＼／＼何でもないです！／＼／＼それより遊星さんどこか出かけるんですか？」

「いや、俺のD・ホイールをメンテナンスに行く」

「そうですか。ご飯が出来たら呼びに行きますね」

「ああ」

遊香の言葉に遊星は頷き、メンテをしに外を出た。

遊香はその間、熱斗の母親である光はる香と家事を手伝う。時間が経つうちに十代や遊戯も目覚めて一行は朝食を食べ、その後いつまでも起きない熱斗を遊香が起こしに行く。

「（ガチャッ！）あつ！おはようですロックマン」

「おはよう遊香ちゃん、今熱斗君を起こそうとしてるんだけど全然起きないんだ…」

「あはは、ロックマンも大変ですね、いつもこんな感じなんですか？」

『うん、やっと起きたと思ったらいつも学校に遅刻してるんだ』

遊香とロックマンは軒をかいてる熱斗を見てため息をつく。

遊香も加えて熱斗を起こそうとするがなかなか起きず、時計が8時に回ってくる。

「もうー熱斗くん！早く起きないと遅刻するデスー！」

「遊香ちゃんどうしたの？」

「よう！ロックマン！」

『おはよう二人とも』

遊戯と十代が部屋に入り、遊香の話を聞くと

「熱斗くん、まさにアニメ通りのキャラだね……」

「お、オレもデュエルアカデミア通ってた時はこんなだったな」

皆に聞こえないような独り言をいいながら呆れていた。

そこで三人はロックマンと一緒に起こそうと

『「「「いい加減に起きろ……!!光熱斗……!!」」「」』

「うわあ……!!!!!!!!!!」

大きい声を出し、ようやくベッドから倒れて目を覚ました。

「ったたた……!いきなり何すんだよ皆!？」

「やっと起きたデス（呆）」

『早くしないと学校遅刻しちゃうよ!』

「やつば……!!遅刻だ……!!」

熱斗は急いで準備をして部屋を出て行った。

「「「………」」「」」

「学校、間に合うのかな……」

「本当に昔の俺だな、アイツ」

「ハハハ……」

熱斗が出て行った方向を見てそう言った。

その後一行は、光博士から昨日来た科学省に来てほしいと連絡が入ったのでそこに向かった。

昨日渡された通行証を見せて正門の中に入る。

〈研究室〉

光博士と名人が一行を迎えてくれた。

「おはよう皆」

「初めての街はどうだ？」

「そうですね…一見ワタシ達の街とあんまり変わりませんが、やっぱり雰囲気は違ってました」

「すげえ所だぜ！どれも見たことないものがあつてわくわくしたぜ！」

「そうか、気に入ってくれてよかったよ。さて早速本題に入ろうか」

光博士がシリアルナンバーカードを科学省で極秘調査し、前回のよくな事件が発生すればモンスターの対抗に協力してほしいという条件だった。

一行はそれを快諾した後、遊星は遊香からシリアルナンバーカードを借りて光博士と名人とともに調査をするも、この世界にとってオーバーテクノロジーで解析するのは非常に難しい状況だった。

ビー！！ビー！！ビー！！

突然科学省でアラームが鳴り始める。

「どうした！？」

「待ってください！…これは！？前回出現したモンスターたちがシテイを襲っています！！」

「何っ!？」

名人の言葉で一行たちは驚愕する。

「光博士、あいつらは俺達で何とかします!」

遊星は自分たちがデンサンシティを守ると言い出した。

「みんな…済まない、頼む!」

「はい!」

「よし!行くぜ!」

一行たちは科学省を飛び出した。

「な、何なのよこいつら!？」

「ウイルスじゃないのか!？」

「こんな種類のウイルス見たことないよ!？」

一方熱斗は友達との学校帰りにモンスターの襲撃に遭い、余りの数の多さに太刀打ちできず逃げることにしかできなかった。

「熱斗!何とかしなさいよ!！」

「そ、そんなこと言っただって!!（こんな時、遊香たちがいてくれたら!!）」

『熱斗君!もうすぐ遊香ちゃんたちの応援が来るから、それまで頑張っ!』

「!分かった!」

「熱斗、どうかしたの!？」

「何でもねえよ!」

一行がこっちに向かっていると聞いて安心する熱斗。ところが

ドカァアアアアアアンッ！

「うわっ！！」

「きゃああああああっ！！」

近くのビルが崩れて道が塞がれてしまった。

「し、しまった！！道が…ロックマン！」

『…駄目だ。囲まれて逃げ道がない！』

「ど、どうしたらいいの！？」

「誰か助けてくれ！！」

動揺も虚しく、距離が近くなり攻撃が迫ってきた。

（だ、駄目だ！ちくしょう！！）

そう諦めかけた時、熱斗たちの前にバリアが貼られ攻撃を免れた。

「こ、これは」

「オレたち、助かったのか！？」

皆が目を見開いている中

「お待ちです〜！」

「なんとか間に合ったか」

「おーい熱斗！お前ら大丈夫か！？」

遊香たちの姿を見て熱斗とロックマンはホッとする。

「ああ！皆大丈夫だぜー！ありがとうなー！」

「熱斗、あの人たちは一体…？」

「心配するな！あいつらは俺たちの仲間だ！」

『彼らは異世界からやってきたんだ』

「『『『『『異世界！？』『』『』『』『』『』』」」」」

熱斗とロックマンの言葉に友人とそのネットナビが声を上げる。

「俺たちが相手だ！行け、【ネオス】！」

十代のネオスはD・HERO達に猛攻をかける。

「【ジャンク・アーチャー】！スクラップ・アロー！」

遊星のジャンク・アーチャーがサイコ・ショッカーに光の矢を放つ。

「行け、！【バスター・ブレイダー】！」

闇遊戲のバスター・ブレイダーで真紅眼の闇竜を切り裂いた。

「【セイクリッド・ソーサラー】！アカシック・ウェーブ！」

遊香も熱斗を守りながら対抗していく。

「す、すごい…」

『デイメンショナルエリアもないのに実体化してる』

『しかも次々と怪獣を圧倒してます』

「一体あいつらは何なんだ？」

熱斗の友人たちは一行を啞然と見ていた。

『もう一人の僕！あれっ！』

「あれは、【青眼の白龍】が3体！？」

『十代見ろ』

「あれは【VWXYZ】かよ！？」

「こっちは【レッドデーモンズ・ドラゴン】！」

一行の前に攻撃力3000クラスのモンスターが出現する。

「どっちも攻撃力3000のモンスターか……」

「しかも【青眼の白龍】や【レッドデーモンズ・ドラゴン】がいるデス」

「何がどうなつてんだ！？」

「とにかく今はやるしかないぜ！」

「おう！」

「魔法カード【融合】発動！フィールドの【バスター・ブレイダー】と手札の【ブラック・マジシャン】を融合！出でよ、【超魔導剣士・ブラック・パラディン】！」

闇遊戯の二体のモンスターを融合させ、ブラック・パラディンが降臨する。

「さらに魔法カード【拡散する波動】！3体の【青眼の白龍】に攻撃！超魔導裂波斬！！」

「こっちもいくぜ！装備魔法【ネオス・フォース】！行けえ【ネオス】！フォース・オブ・ネオスペース！！」

闇遊戯と十代で青眼の白龍とVWXYZが破壊される。

「ワタシもやるです！【朱光の宣告者】を召喚！レベル6【セイクリッド・ソーサラー】にレベル2【朱光の宣告者】をチューニング！」

二つのリングがセイクリッド・ソーサラーを包む。

「闇夜を包む白き月よ、星雲の翼を広げて友を導け！シンクロ召喚！来たれ、【クリアス・ルーナ・ドラゴン】！」

白く透明な体と緑の粒子が光る翼を持つ神秘のドラゴンが遊香の前に現れる。

「遊星さん！ワタシの力を使うデス！」

「ああ！」

「『【クリアス・ルーナ・ドラゴン】の効果！このカード以外のモンスターは攻撃力をこのカードの攻撃力分アップするデス！」」

クリアス・ルーナ・ドラゴンの白いオーラがジャンク・アーチャーにうつる。

「遊香！お前の力確かに受け取ったぞ！【ジャンク・アーチャー】で【レッドデーモンズ・ドラゴン】に攻撃！スクラップ・ルーナ・アロー！」

レッドデーモンズ・ドラゴンが光の矢に貫かれ、爆発した。

「すげえ…すげえよ！」

『うん！』

「やったー！全部やつつけたよー！」

「すごくカッコいい！」

熱斗を含め、ギャラリーたちが喜びが浮かんだ。

「よっしゃあ！どんなもんだい！」

「熱斗たちも無事みたいだな…」

「一先ず一見落着デス！」

「ああ…」

「おお〜い！！！」

熱斗の声に振り向くと、友人たちも一緒にこっちに向かってきた。

第2話：ネット世界の危機！？（後書き）

今回のキーカード

【クリアス・ルーナ・ドラゴン】

レベル8 / 光属性 / ドラゴン族 / ATK 2700 DEF 1800
チューナー＋チューナー以外のモンスター1体以上

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、このカード以外の自分フィールド上のモンスターの攻撃力はこのカードの攻撃力分アップする。

このカードがカードの効果で破壊され墓地に送られた時、自分は800ポイント回復する。

今回は長く作ったので結構時間かかりましたが、あんまり違和感がなく出来上がったと思います；

前話より内容が多少難しいかも……。それにしても熱斗の遅刻癖は作った自分から見ても相変わらず面白いなあ（笑）イマイチなのは遊戯がブラマジ、十代がネオスを使ったのに遊星だけジャンク・アーチャーとはどうだろうか？

本当はこの話でデュエルを書きたかったんですけど、作っていくうちに長くなっていたのでナシにしました。

他の作品見ただけでデュエルを文章にするのって難しいんですね；

もしデュエルの文章で違和感出てたらスイマセン（汗）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2579r/>

遊戯王～異世界に巡りし絆～

2011年10月8日19時04分発行